
ショート：雪だるまの冷蔵庫

柏木一木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シヨート：雪だるまの冷蔵庫

【Nコード】

N89850

【作者名】

柏木一木

【あらすじ】

雪国を舞台にした社会人カップルの一シーンを切り取った話です。

「冷蔵庫なんてよく壊せるよね」

背中を向けていた僕に、呆れたような口調でサチエは言った。

「五年ばかり一人暮らしをしているけど、そんな経験ないよ」

作業がもうすぐ終わりそうだったので、その言葉をひとまず無視する。エンターボタンを叩き、プログラムを走らせると、先ほどまで静かだった冷却ファンが音を出し始めた。うちのパソコンのスペックならば、半日もあれば解析結果が出てくるだろう。あとは待つだけだ。モニターの電源を切って、背を伸ばした。

「お前の辞書には慈悲という言葉はないのかね」

座椅子を回転させて、コタツに足を入れながらそう答えた。サチエは持参した小さなぬいぐるみ（タヌキだろうか？）を強く抱きしめながら、僕を睨みつけている。

「あるけど使わないだけ」

そう言って、僕のすねを蹴っ飛ばした。

「タツヤが出張から帰ってきて、ひさしぶりに会えたと思ったのに、ずっとパソコンと睨めっこなんだもん。そんな人に優しさをかけることはできないよ」

「僕だって、せつかくの休みをこんなことに使いたくないよ。でも

ね、今から計算させておかないと、明日までに間に合わないんだ。遅刻する覚悟があるなら別だけど。本当だったら、部屋をあけていた間に、この計算は終わっていたはずだったんだ」

「でも、ブレーカーが落ちてしまったと。それで、冷蔵庫もダメになったと、そういうことをいいたいわけ？」

「そういうこと。でも、まさかブレーカーが落ちるなんて思わなかったよ。他にパソコンを二台起動させていたのが問題だったのかな？ とにかく、原因は不明」

「大方、こたつの電源でも入れっぱなしだったんじゃないの」

サチエはため息をついた。

「だいたいさあ、普通、ブレーカーってキッチン用とか、分割されているんじゃないの？」

「見ての通り、六畳のワンルームという貧相な部屋だからね。全部まとめてあるのさ」

「最悪。これから、どうするの？ 冬まっさかりといっても、部屋の中は温いから、野菜とかダメにならない？」

ふむ、と手を顎にあてて考え始めた。ヒゲが伸びているとか、サチエはどうしてぬいぐるみをいつも手放さないのだろうと、雑念が浮かんで消える。

そして、冗談めいた考えが形を成した。

「雪を使って、冷蔵庫替わりにするか」

「……はい？」

「せつかくの雪国だ。使わないのはもったいないから……ごめんなさい、冗談です」

思ったよりも反応が薄かったので、すぐに謝った。寒いジョークを引く張ることほど、寒いものはない。しかし、彼女は感銘を得たかのように、手を叩いた。

「いいじゃない、それ。雪の冷蔵庫。うん、なんとなく素敵だね」

《なんとなく》という表現を使うことから、これはサチエの嫌がらせなんだろう。そう思いながらも、僕は彼女の提案に乗ることにした。身から出た錆だけど、彼女の機嫌が治るだったら、この錆はダイヤモンドと同価値だ。

冷蔵庫の中に入っていたものを全部ビニール袋に詰め込んで、僕とサチエは外に出た。目の前に広がる白い光景は見なれていて、これといってなにも思いつかなかった。冬に雪があるのは当然。ホワイトクリスマスもまた当然。ロマンチックな言葉を当てはめる方はできない。トンネルを抜けたら（以下省略）という文章を考えついた川端康成に対して、尊敬の念を意味もなく抱く。

「スコップでも持ってくる？ 雪下ろし的时候に使うのが共同倉庫の中に入っているし」

「雪だるまを作る要領で作ればいいんじゃないかな？ というよりも、雪だるままでいいじゃない。雪だるまの冷蔵庫。ふふふ、素敵だね」

《なんとなく》が消えたことを僕は聞き逃さなかった。

その提案をすぐさま了承し、僕達は握りこぶし大の雪玉を作って、転がしはじめた。数分で、歪で大きな雪玉と綺麗で小さな雪玉の二つができあがった。僕が作ったのは前者。こういう細かい作業はあまり得意じゃない。

「もうちょっと、まともな形にできないかね」

サチエの言葉を見無視して、彼女が作った雪玉を持ち上げる。割れないように配慮しながらも、自分が作った歪な雪玉に叩き付けるように置いた。転がり落ちないのを確認して一息つく。彼女の方を見ると、屈みこんで冷蔵庫の中身が入ったビニール袋を漁っていた。

「本当に冷蔵庫にするんだ」

「冗談を本気にするから面白いんですよ」

と、彼女は笑っていたが、その表情が怪訝なものに変わる。

「あのさ、なんでこの中にしょう油があるの？」

「なにがおかしいんだ？」

「缶詰めも入っているし、あんな、マジで生活能力ないね」

サチエは立ち上がり、拳を突き出して僕の胸に軽く当てた。

「このバカは根本から変えていかないと、ダメだね」

一拍の間黙ったあと、サチエは僕のことをまっすぐに見つめる。

「引越すする気ない?」

「なんで?」

僕の疑問に答えぬまま、彼女は勝手に喋り続ける。

「広い部屋を借りてね。もちろん、駅に近いのが必須。あとはねー」

「だから、なんでだよ」

「判らないかねー、このバカは」

サチエは、わざとらしく、大きく息をはきだした。

「一緒に暮らそうよ。もう、三年もつき合ってるし、ここまで気を置けない人は他にいないと思うし、えーと、あと、うちに冷蔵庫あるから、雪だるま使わなくて済むよ」

「ええーと、つまり?」

「結婚しようよ」

展開の速さに、僕の頭はついていけなくなる。一応、就職している。そこそこに給料もらっている。そんな経済的な考えが浮かぶ。とくに問題ない。僕もサチエのこと好きだ。一緒にいたいと思う。なにも問題ない。

「そうしょっか」

そう答えると、サチエは苦笑いを浮かべた。

「ちょっと！ ロマンチックにお願い」

「うーん、そうだね……」

と言われてもロマンチックな言葉は到底思いつかない。

困った僕は、言葉ではなく行動で、唇を彼女の唇を合わせた。

とてもひんやりする。なんとなくだけでも、ロマンチックという言葉はポカポカするようなイメージがあるので、間違っただかもしれない。

唇を離れたあと、申し訳なさそうにサチエのことを見る。

「うん、とっても素敵」

彼女はにこりと笑った。

(後書き)

昔、原稿用紙10枚以内、「雪だるま・缶詰・遅刻」という三題噺で書いたショートショートです。

お題を完遂させることよりも、最低限必要な状況説明をいかに描くかということに重点に置きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8985o/>

ショート：雪だるまの冷蔵庫

2010年11月14日02時21分発行